

尾張低地部における 小規模古墳の様相

● 宮腰健司

朝日遺跡は弥生時代の環濠集落として著名であるが、その後の古墳時代中期～後期にも墳墓が存在する。本文では、この朝日遺跡の古墳と須恵器・土師器の分布を検討し、遺構が検出された中央部以外にも西部に古墳が存在する可能性があること、またそれらの造営に際しては、前時代の埋没しきらない方形周溝墓群の痕跡を意識して造られていること、数基単位で構成され群集しないことを指摘した。さらに、このような様相を見せる小規模古墳が尾張低地部では一般的であることを述べ、墳墓への埋葬以外に墳丘やその痕跡である高まりへの祭祀が行われていた可能性を示唆している。

はじめに

愛知県西春日井郡清洲町に所在する朝日遺跡は、東海地方屈指の弥生時代集落として著名である。遺跡は弥生時代前期より古墳時代前期まで連続して続くことは知られているが、その後の古墳時代中葉以降の様相についてはこれまであまり述べられてこなかった。発掘調査や採集遺物の中に須恵器が混じることはかねてより認識されていたし、調査の成果として、円墳の痕跡や愛知県指定史跡である検見塚の周溝が見つかった。

この文では検出遺構や須恵器・土師器の分布から、古墳時代中期から後期、およそ5世紀から6世紀にわたる時期の朝日遺跡の景観を復元し、尾張低地部の前方後円墳や前方後方墳などの大型首長墓とは異なる、小規模な古墳との比較を試みたいと思う。

1 朝日遺跡の様相

(1) 須恵器・土師器の分布状況

朝日遺跡において須恵器・土師器が出土する地点としては、中央部とさらに500m程西にある西部に分かれる。

A 中央部 (図1)

谷Aが南に湾曲して北東側に走り、谷Bと分

岐するあたりを中心とした地域で、弥生時代の遺構でいえば、南居住域の北半、北居住域の南東、東墓域の西端になる。この地域では、愛知県教育委員会調査分の土師器の選別が行えなかったため、須恵器・埴輪の分布についてのみ確認している。また1破片が1ドットで、口縁部は全周の1/12を白抜きドット1つで示している。

この地域にはもとより、中世から江戸時代に行われた検見に使用されたと伝えられる、高さ2m程、直径15m程の高まり検見塚(検見塚貝塚)が所在しており、昭和63年度の調査で、二重の周溝が巡ることが確認され、古墳であることが判明した。ただ、封土中には貝などが多量に混入する場所があり、後世の攪乱をうけている可能性が高いものと思われる。この古墳SZ1002は、弧状に平行して走る2本の周溝が検出されており、外側の溝(SD02)が幅約3m、内側の溝(SD01)が幅約4m、溝間は約2mで、両溝とも残りが悪く、約25cmの深さである。また墳丘も削平を受け残存していない。この弧状の溝の円周を正円として大きさを割り出すと、検見塚を中心として、内側の溝の内周が約36m、外側の溝の外周が約53mになると推定される。西側と北側で円筒埴輪片が出土している。

その西北西約20mのところ、周溝を含めた直径約14mで1重の周溝が巡る円墳(SZ1001)が検出されている。周溝の幅は約2.5m、深さ20cmで、南部から正立で置かれていたと思われる

甕が1個体出土している。また墳丘部分も削平されており、確認されていない。

中央部における、この2基の古墳以外の須恵器分布をみると、1645の把手付椀や杯身、1635の杯蓋が弥生時代中期の方形周溝墓があった地点から出土しているのに注目したい。前者は愛知県教育委員会の調査で台状遺構とされたSZ142～145（台状遺構1～4号）部分、後者が墳丘において2棟の掘立柱建物が確認されている長径約24m、短径約19mの大型方形周溝墓SZ254（SX057）の南溝から出土している。また1634・1636・1637・1647についても、基本的には東方形周溝墓群部分に属すると考えられるが、1647・1637は谷に接続する大規模な溝（SDXIII・XIV）およびその肩付近。1634・1636は谷B埋土より出土している。谷は中世におけるまで窪地状を呈しており、この時期も溝状になっていたと考えると、これらの遺物群はそこに流れ込んだものである可能性も指摘できる。（七原恵史・加藤安信他1982・石黒立人・宮腰健司他1991・石黒立人・宮腰健司他1994）

B 西部（図2・3・4）

国指定史跡である貝殻山貝塚を中心とした地域で、周辺では幾度かにわたる発掘調査が行われている。今回は、報告書が刊行されており、出土位置等のデータが揃っている昭和46年に県教育委員会によって実施された土地改良事業に伴うトレンチ調査と、平成7・8年度に愛知県埋蔵文化財センターが行った新資料館建設に伴う調査の資料をもとに、須恵器・土師器の分布を作成した。愛知県教育委員会調査分は、トレンチ名しか判明しないものとトレンチのどの部分か判るものの2種があり、愛知県埋蔵文化財センター調査分については大半が5m四方のグリッド内からの出土として取り上げられている。また貝殻山貝塚で確認できた採集資料のうち、位置が確認できる二反地貝塚周辺および中焼野貝塚周辺出土のものと、『朝日遺跡I～IV』（愛知県教育委員会1982）に掲載されている貝殻山北側出土の一群については推定される位置を示している。

須恵器については、5cm以上の破片1片がドット1つ、3cm以上の破片1片が網ドット1つ、そのうち口縁部全周の1/12が白抜きドット1つとした。さらに、甕は破片5片を1つの大きなドッ

トで表記している。土師器については、甕口縁部と台部、高杯脚端部をカウントし、各々全周の1/12を1ドットとした。また図4で図示した土器は、ドットで表した個体となる。

分布状況を見ると、まず目に付くのは貝殻山貝塚周辺の遺物の少なさである。北および西では須恵器・土師器が出土しているトレンチは若干あるが、東側になるとほとんど見当たらない。

次に集中地帯をあげると、A～Cの3つのブロックがある。Aブロックは貝殻山貝塚の北西部にあたり、弥生時代前期と言われる人骨2体が出土した地点になる。このブロックについては杯・椀・高杯などがやや少ないようであるが、須恵器・土師器ともまとまって出土していると言えよう。

Bブロックは中焼野貝塚とその南にあたる地点で、愛知県埋蔵文化財センターの95・96調査区では貝廃棄を埋土とする弥生時代前期の環濠が検出されている。ここでは須恵器が目立つが、その中でも甕片が非常に多く出土している。がしかし、これは甕の個体数が多いというわけではなく、原形が大型のため、割れた場合に破片数が増えという理由のためで、口縁部片で見た場合決して多数なわけではなく、むしろA地域の方が多いくらいである。また95・96調査区の所見では、調査区北側にあたる中焼野貝塚は、弥生時代前期～中期前葉の環濠に廃棄された貝層が、後世の削平によって高まり状残っていた痕跡ではないかとされている。Bブロック出土遺物は、この高まりに伴うものか、もしくは削り残された貝層にさらに土盛りをしたことにより、周囲より須恵器・土師器がかき集められた状態になった可能性が考えられる。

Cブロックは前記の95・96調査区内の弥生時代後期の方形周溝墓周辺にあたり、他のブロックに比べ土師器が多いことが特徴である。また2022・2023・2030の甕については、ほぼ1個体が正位または横位でそのまま潰れた状態で出土している。（伊藤稔・柴垣勇夫1972・宮腰健司他2000）

（2）95・96調査区の景観について

平成7・8年度に愛知県埋蔵文化財センターによって調査された95・96調査区は、前記の須恵器・土師器が集中するBとCブロックを含んで

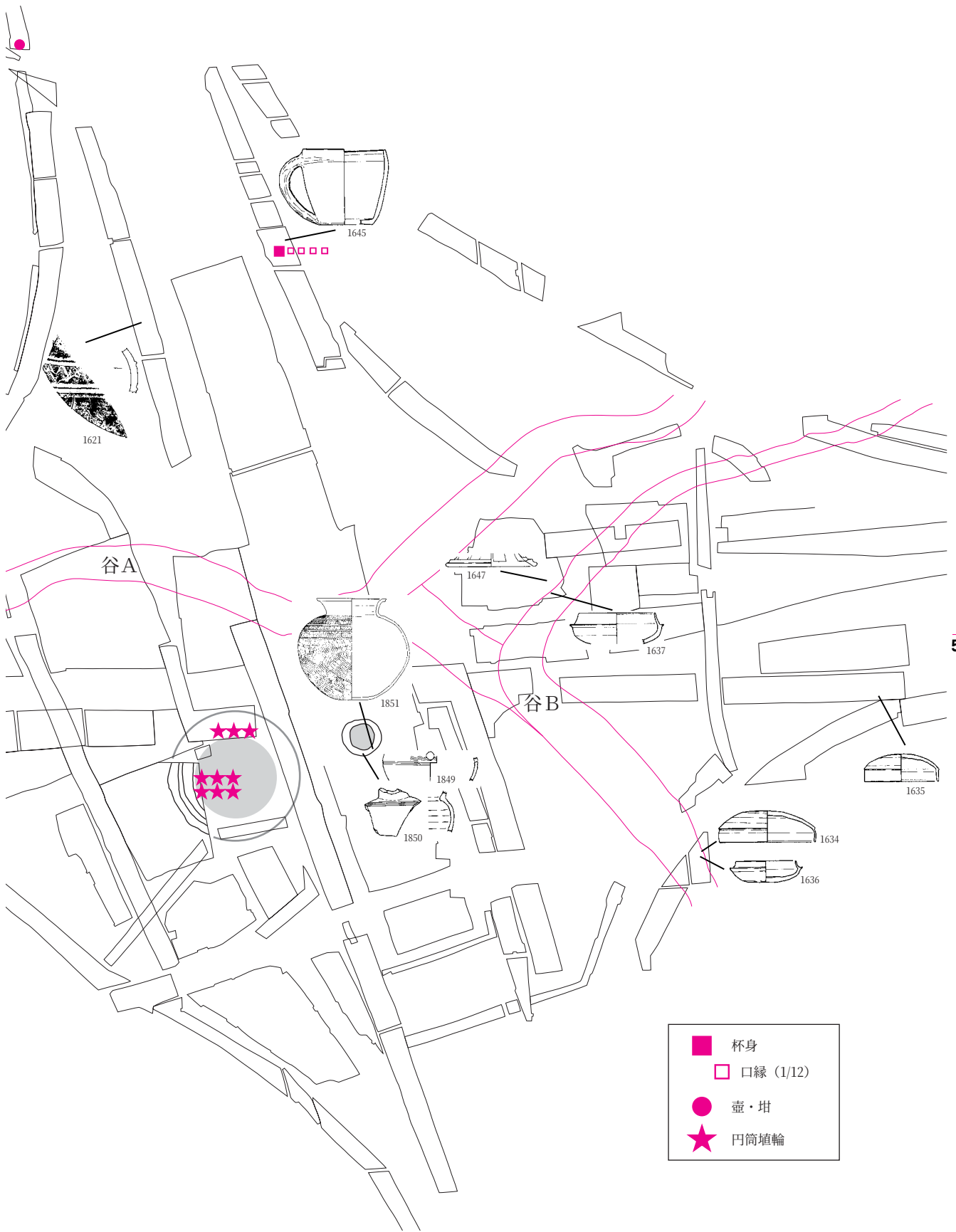


図1 朝日遺跡中央部 須恵器分布 1:2,000

※七原恵史・加藤安信他 1982・石黒立人・宮腰健司他 1991・石黒立人・宮腰健司他 1994 より作成

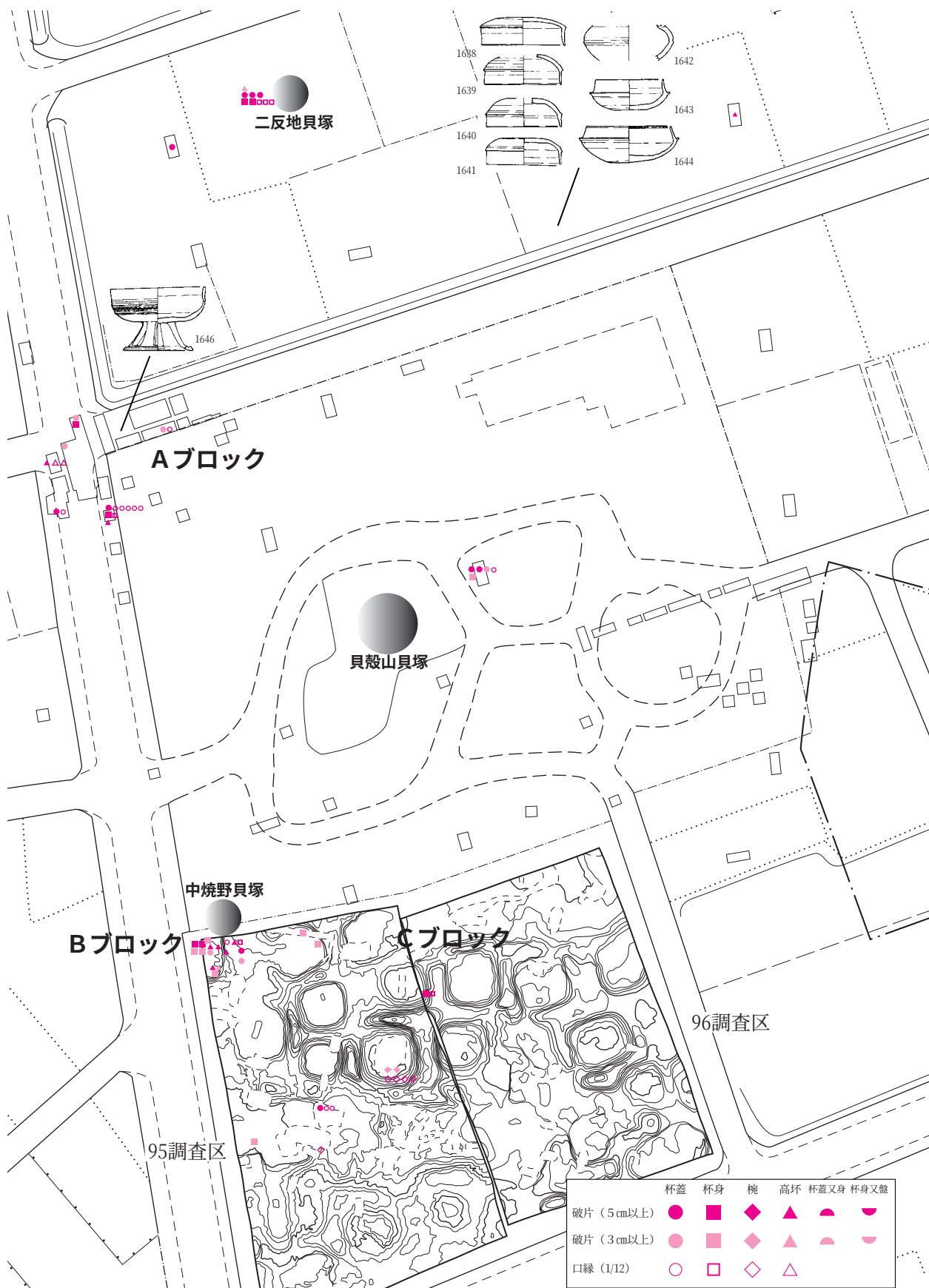


図2 朝日遺跡西部 須恵器分布1 1:1,000

※伊藤稔・柴垣勇夫 1972・宮腰健司他 2000 より作成

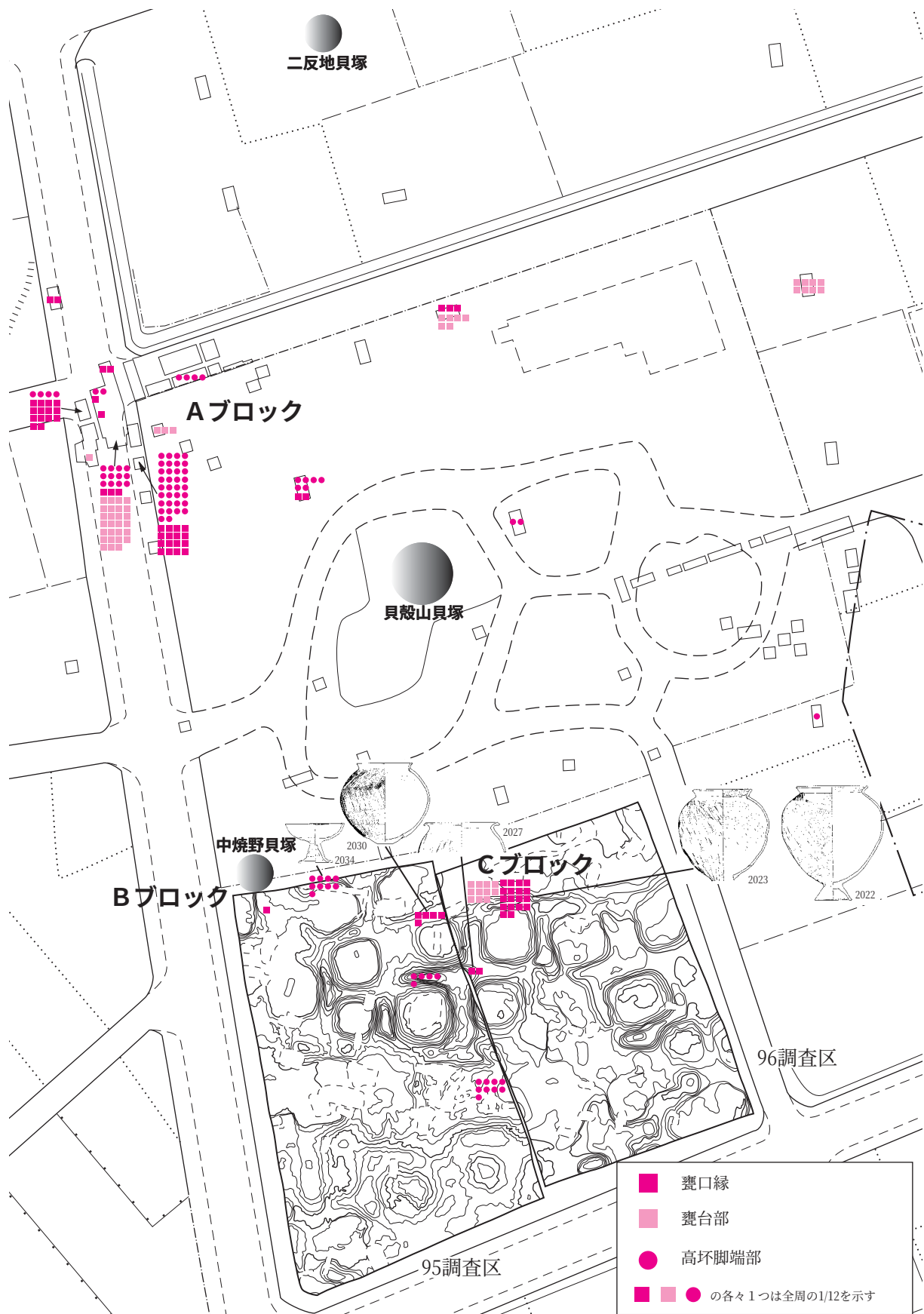
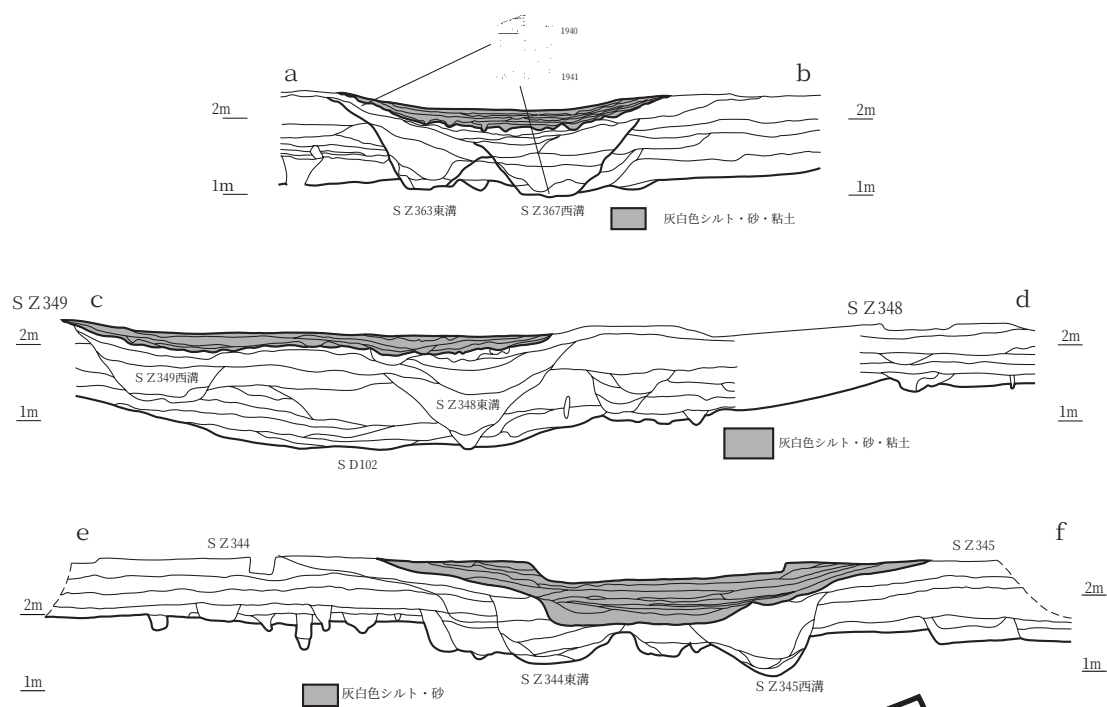


図4 朝日遺跡西部地区 土師器甕・高坏 1:1,000

※伊藤稔・柴垣勇夫 1972・宮腰健司他 2000 より作成



セクション 1/100、平面図 1/600

図5 古墳時代中期の95・96調査区とセクション

いる。以降発掘調査所見をもとに、これら遺物を出土した遺構について考えてみたいと思う。

95・96 調査区では、表土下の中世遺物を包含する灰色粘土層を除去すると、灰白色シルト・砂・粘土層および溝最下層にはケヤキやスギの流木を含む灰色がかった黒色砂があり、その層より古墳時代中期～後期の遺物が出土している。Cブロックでそのまま潰れた状態で見つかった甕2022・2030などは、灰白色シルト・砂・粘土層の最下層、下層の弥生時代包含層である黒色砂との境あたりで出土しており、これらの層が当該期中に堆積したものと考えてよいであろう。つまり、灰白色シルト・砂・粘土層を除去した状態が少なくとも古墳時代中期の地表の様相を示していると思われるのである。これら古墳時代の包含層を除いた後の状況という、明確な遺構は確認できないが、10 m程の隅丸方形の高まりの連続と、その間の切れ目のない浅い溝が調査区北半で、不明瞭な低い高まりとその間の浅い溝が南半で検出されている。これらは後ほどの調査で、北半が弥生時代後期の、南半が中期の方形周溝墓の痕跡をほぼ忠実に浮かび上がらせていることが確認できている。つまり、高さは上方が削平を受けて平らになっているため不明であるが、廃絶された弥生時代の遺構である方形周溝墓の配置そのままの景観が、古墳時代中期まで残存していたものと考えられるのである。また溝部分の状況であるが、図5のセクション図のa-b、c-dを見ると、現況で20～30 cmとさきわめて浅くなっている。ただ95・96 調査区の中央部分e-f周辺では、古墳時代中期～後期の堆積層が最大で80 cm程の厚さになっており、この一帯に関しては、当時改めて掘削がなされている可能性も指摘できるかと思う。

まとめると、貝殻山貝塚の南側には、弥生時代中期～後期の方形周溝墓の配置そのままの状態（時期の違いであろうか、北半の後期の遺構は比較的是っきりと、南半の中期のものは不明瞭な状況で）で、切れ目のない浅い溝とある程度の高さをもった隅丸方形または円形（楕円）の高まりが連続している景観が復元できる。またさらに想像を膨らませると、それらの高まり群の北端には、土師器甕2022・2030などが据え置かれたのではないかと想定できるのである。

2 尾張低地部の様相

（1）門間沼遺跡（図6）

葉栗郡木曽川町にある、弥生時代から中世にかけての遺跡である。遺跡は幾つかの小河川に挟まれた標高7 m前後の微高地上に立地し、遺構はその形状の沿って細長く展開していく。古墳は、遺跡の西部で4基検出されている。94 C区のSZ01・SZ02は二重の周溝をもつもので、両者の間隔は約1 mとほぼ接するように築かれている。SZ01・SZ02ともほぼ同規模で、外周が約12 m、内周が約7 m、周溝はやや不定形であるが外溝が2～4 m、内溝が0.9 m～1.6 mを測り、二段築成の模倣ではないかとされている。遺物は周溝内より須恵器・土師器とともに木製品が出土しており、時期は5世紀後半～6世紀前半に比定される。その70 m程東の94 A区には、径約16 m、溝幅約1.2 mのSZ01、とその南東15 m程に径約9 m、溝幅約0.9 mのSZ02がある。これ以外の注目されることとして、遺構を区画するように走り、琴を出土した溝群や、古墳に隣接する井戸群・掘立柱建物群・竪穴式住居などがあり、5世紀後葉から7世紀前葉までと長い期間となるが、墳墓を含めた土地利用を知ることができる資料となっている（石黒立人他1999）。

（2）山中遺跡（図7）

一宮市に所在し、標高5 m前後の自然堤防上に遺跡が立地する。溝幅1～3 mのやや不定形な円墳の周溝の一部が検出されており、復元径は14 mとされている。なお墳丘部分より金環が出土しており、時期は6世紀代に比定されている（石黒立人他1993）。

（3）大塚古墳

稲沢市に所在し、三宅川の左岸の標高4 mの自然堤防上に立地する。トレンチ調査が行われているのみで、まだ墳形については不明な点が多く、後世の削平や改変も行われているようであるが、おおむね直径40～50 m、周溝幅7 m、墳丘の高さ4～5 mの古墳と考えられる。周溝内より、須恵器・土師器、円筒・蓋形・朝顔形埴輪が出土しており、時期は、5世紀後半から6世紀前半に比定される（北條献示・日野幸治他1983・1984）。

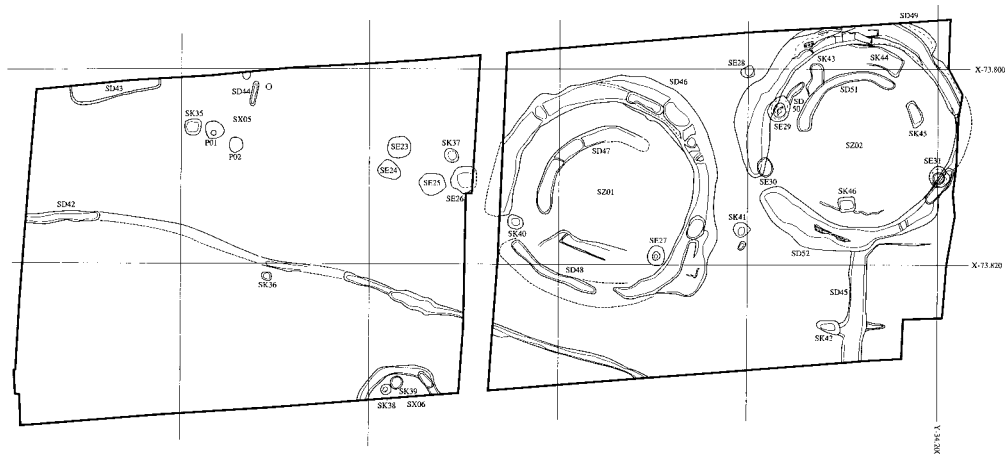


図6 門間沼遺跡94C区 1:800 (石黒立人他 1999 より転載)

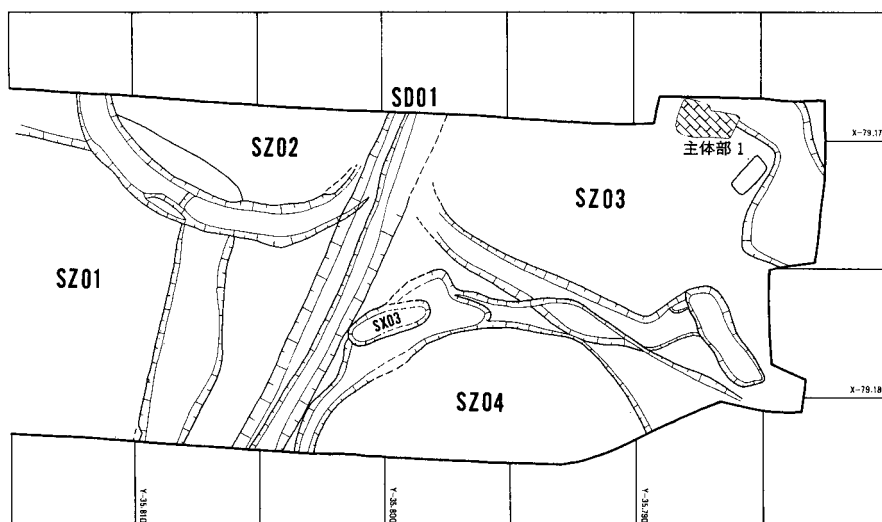


図7 山中遺跡 1:300 (石黒立人他 1993 より転載)

※ SZ01～03が弥生時代後期～古墳時代初頭。SZ04が古墳時代中期～後期

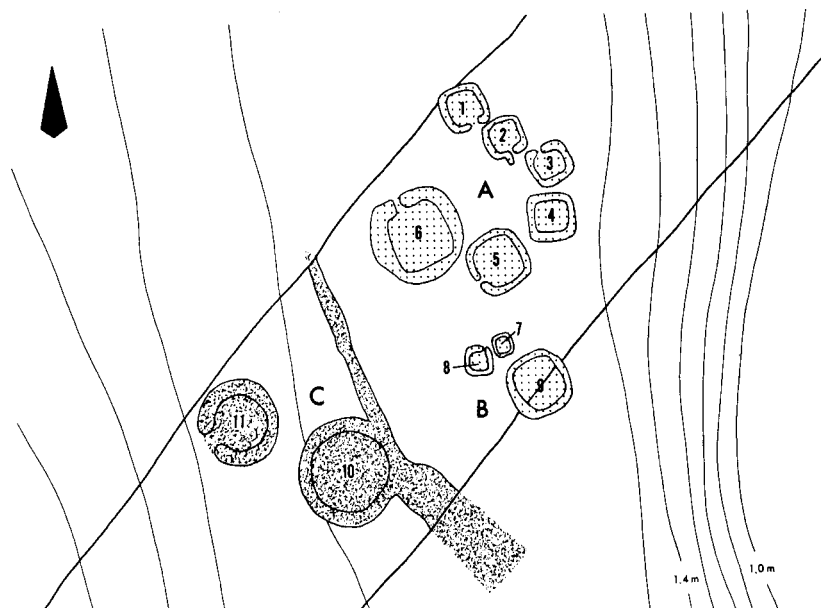


図8 土田遺跡 1:1,800 (赤塚次郎他 1987 より転載)

※ 1～9が古墳時代初頭、10・11が古墳時代中期～後期

(4) 岩倉城遺跡

岩倉市に所在し、南に流れる五条川沿いの標高8～10mの自然堤防上に立地する。古墳は五条川を挟んだ両岸にみられる。右岸では、一辺26m、周溝幅4m程の方墳SZ1301の南部分が検出され、5世紀後葉の須恵器・円筒埴輪・金環が出土している。また左岸で幅6mの周溝のみが検出された、6世紀前葉に比定されるSZ1302については、報告書中で一辺17m程度の方墳とされており、埋没した周溝上に棺を設置するための集石遺構が8基検出されている。さらに、SZ1302の周溝をコーナー部でわずかに切るように造られた一辺13m程度、溝幅1.2～2mを測る方墳SZ1303と、その周溝と同方向を向いて、周溝の一部がブリッジ状に掘り残されている溝幅約5.5mの方墳SZ1304が検出されている。時期は5世紀中葉（松原隆治・服部信博他1992）。

(5) 土田遺跡（図8）

西春日井郡清洲町に所在し、標高3～4mの五条川右岸の微高地に立地する。2基の円墳が7m程しか離れず、近接して確認されている。6世紀中葉に比定されるSZ10は径18.5m、溝幅1.5～1.8m、6世紀前葉に比定されるSZ11は径18m、溝幅2.5～3mを測り、西側に開口部が存在する。また、SZ10の周溝と重なるように古墳時代後期と考えられる幅3mの溝SD30が走り、その北東側には古墳時代初頭の方形周溝墓が展開している（赤塚次郎他1987）。

(6) 高塚古墳

西春日井郡西春町に所在し、標高4～5mの五条川左岸の自然堤防上に立地する。墳形は長径約15m、短径約2mの「造出し」部をもつ、径約40mの円墳である。周溝幅は約10mを測り、

円筒・形象埴輪や葺石である可能性のある円礫が出土している。時期は5世紀前葉があてられる（伊藤秋男・澤村雄一郎他1994）。

(7) 能田旭古墳（図9）

西春日井郡師勝町に所在し、五条川やその支流が作り出した標高5mの自然堤防上に立地する。墳形は、突出部が付くいわゆる「帆立貝式古墳」となり、推定全長が約43m、墳丘径が約37m、突出部長径約22m、短径約8m、溝幅2～6mを測る。墳丘は残存していなかったが、周溝より円筒・朝顔形・形象埴輪、笠形・しゃもじ形木製品を含めた多量の木製品、須恵器・土師器が出土しており、時期は5世紀後葉～6世紀初頭に比定される。また地籍図や航空写真の調査によると、40m程西に、周溝を伴った全長約54mの古墳（能田旭西古墳）が存在したようである（伊藤秋男・市橋芳則他1986・伊藤秋男・森崇史・市橋芳則1989）。

まとめ

以上朝日遺跡を中心に古墳時代中期～後期にかけての尾張低地部の小規模古墳の様相をみてきた。これらのことをまとめると、下記の2つのポイントになる。

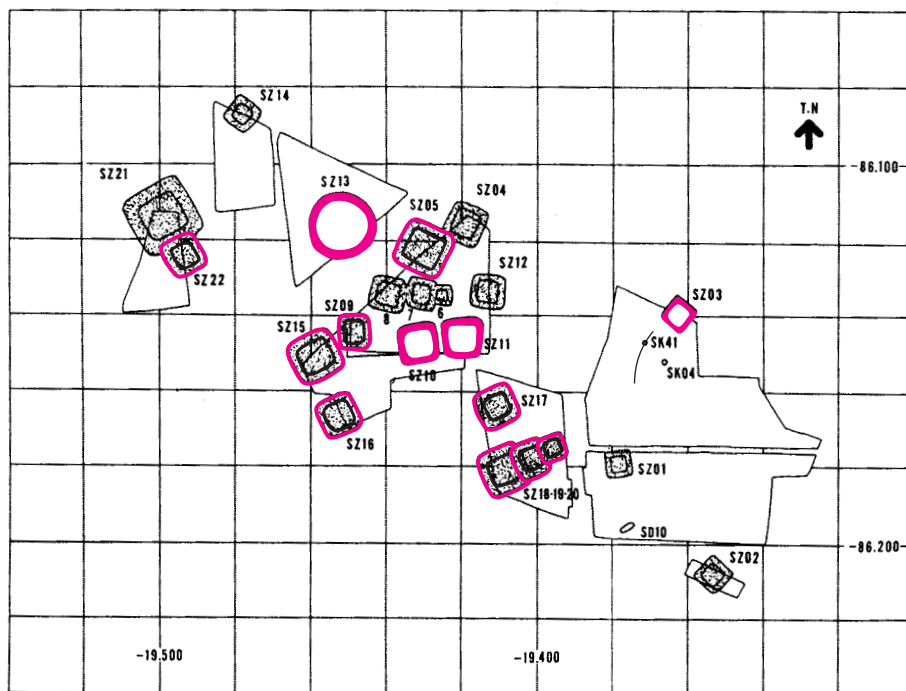
① 尾張低地部においては、一定の地区に連続して墳墓が造営されることはなく、2～4基程度の円（帆立貝式）または方墳が散漫に築かれるということが一般的と見られる。さらに言えば、朝日遺跡中央部や門間沼遺跡、土田遺跡の事例のように、2基がひとつの単位で、かつ近接して造られる傾向が見られる。

② 次に朝日遺跡で示したように、この時期にはまだ弥生時代以降の既存の墳墓の痕跡が残存していた可能性が高いということである。この例として、低地部の遺跡ではないが春日井市にある勝川遺跡を取り上げてみたい（図10）。

勝川遺跡は標高13mの洪積台地上と標高11mの洪積台地下に立地する。墓域は洪積台地上の上屋敷地区から検出され、弥生時代後期～古墳時代初頭と古墳時代中期～後期に大きく2時期に分かれる。弥生時代後期～古墳時代初頭の墳墓は周溝を共有しながら築造されていくことが多く、SZ18・19・20が典型的なもので、SZ05・



図9 地籍図からみた能田旭古墳と能田旭西古墳



※12の図版を改変

□ 弥生時代後期～古墳時代初頭
 □ 古墳時代中期～後期

図10 勝川遺跡 1:2,000

04、SZ22・21、SZ06・07・08などもこの時期かと考えられる。それ以外ではSZ09・15・16のように単独なものも見受けられる。5世紀後半～6世紀前半にわたる、古墳時代中期～後期の墳墓はSZ03・10・11のように単独で造られており、径16mを測る円墳SZ13もその中に存在する。

この勝川遺跡で注目すべきは、上屋敷地区では方形周溝墓や古墳が方向・築造方法を変えながら弥生時代後期から古墳時代後期、時間的には300年～400年の間、既存の墳丘を削平・改変することなく造墓活動が行われていくということにある。つまり、相当期間経ても、過去の遺構が何らかの構造物または高まりと認識されていたことを示していると思われるのである。

このような認識で改めて今回取り上げた遺跡を見ていくと、土田遺跡では溝SD30を境にして古墳時代初頭の墓域と中期～後期の墓域が対峙するような位置にあり、山中遺跡の場合も弥生時代後期～古墳時代初頭の方形周溝墓の隙間に造られているように見える。また朝日遺跡中央部においても、2基の古墳は東にある墓域と谷を

隔てた対岸に位置している。これらの事例は、当時墳墓と意識されていたか否かはわからないが、新たな墓の造営によって破壊すべきものではないという認識があった結果であると考えたい。つまり古墳時代中期には、朝日遺跡95・96調査区のみならず尾張北部各地において、前代の構築物の残存である墳丘の高まりと周溝の窪みが、それとわかるぐらいに看取できていたと思われるのである。

さらにこれらのことを前提に、改めて朝日遺跡の古墳時代中期～後期の景観ということに立ち戻ってみると、中央部では50mクラスと10mクラスの2基の円墳が立ち並び、谷地形の向こうには径30mを超える大型方形周溝墓を有する弥生時代における朝日遺跡最大の墓域であった東墓域の名残が広がる風景が想定できる。また、西部にも同様の方形周溝墓の痕跡があって、その高まりと窪みがある場所に土師器甕などの供献がなされていたと想定できるであろう。さらに想像を逞しくするならば、西部の貝殻山貝塚の周辺では須恵器・土師器などがまとまって一定

量出土するが、現在もはっきりと高まりとわかる貝塚近辺では遺物がほとんど出土しない。当時墳丘裾部や周溝内で供献遺物が出土する事が一般的であることを考えると、貝殻山貝塚部分に古墳またはそれに類する高まりが存在したと推定でき、ここでも中央部と同じように、古墳と方形周溝墓の痕跡という組み合わせがあると考えられるのである。

また、植田文雄は古墳時代前期に、定型化した前方後円（方）墳以外とは別の高塚墳が成立し、それらは葬送のみで終了する低塚とは異なり、祭祀が繰り返し行われたと述べられおり、前記した既存の構築物の高まり・窪地に対する取り扱われ方や、古墳の数の少なさなど、古墳時代中期に造られる尾張平野の小規模古墳についても、埋葬の場という以外にも再考の余地があるように思われる（植田文雄 2002）。

これまで取り上げた墳墓については、当然のことながら大地域の首長墓となる大型前方後円（方）墳、大型円（方）墳、小型円（方）墳といった関係の中で考察されねばならず、本文の事例の中でも、供献遺物を多量に出土する比較的大型な墳墓、能田旭古墳や高塚古墳については、別のランクを考えなければいけないかもしれない。また、中期～後期という大雑把な括りのみで、細かい時期についてはまったく触れなかった。このことは、埋葬が終わった高塚に対して、その後幾度かの祭祀が行われた可能性が高いということ を考慮すると、遺物の出土状況を含め今後検討しなければいけない課題であろう。

この文・図版を作成するにあたり、野口哲也、原田幹、河合明美、田口雄一の各氏には多大な協力をいただいた。記して感謝するしだいである。

参考文献

- 七原恵史・加藤安信他 1982 『朝日遺跡Ⅰ～Ⅳ』愛知県教育委員会
 石黒立人・宮腰健司他 1991 『朝日遺跡Ⅰ』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集）（財）愛知県埋蔵文化財センター
 石黒立人・宮腰健司他 1994 『朝日遺跡Ⅴ』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集）（財）愛知県埋蔵文化財センター
 伊藤稔・柴垣勇夫 1972 『貝殻山貝塚調査報告』愛知県教育委員会
 宮腰健司他 2000 『朝日遺跡Ⅵ』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集）（財）愛知県埋蔵文化財センター
 石黒立人他 1999 『門間沼遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第89集）（財）愛知県埋蔵文化財センター
 石黒立人他 1993 『山中遺跡Ⅱ』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第45集）（財）愛知県埋蔵文化財センター
 北條献示・日野幸治他 1983 『大塚古墳範囲確認調査報告書（Ⅰ）』稲沢市教育委員会
 北條献示・日野幸治他 1984 『大塚古墳範囲確認調査報告書（Ⅱ）』稲沢市教育委員会
 松原隆治・服部信博他 1992 『岩倉城遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第38集）（財）愛知県埋蔵文化財センター
 赤塚次郎他 1987 『土田遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集）（財）愛知県埋蔵文化財センター
 伊藤秋男・澤村雄一郎他 1994 『高塚古墳発掘調査報告書』（南山大学大学院考古学研究報告第2冊）南山大学高塚古墳発掘調査会
 伊藤秋男・市橋芳則他 1986 『能田旭古墳―第一次発掘調査報告―』師勝町教育委員会
 伊藤秋男・森崇史・市橋芳則 1989 『能田旭古墳―第二次発掘調査報告―』師勝町教育委員会
 赤塚次郎他 1984 『勝川』（愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査報告書第1集）（財）愛知県教育サービスセンター
 植田文雄 2002 「墳丘墓と古墳―墳丘築造の飛躍と史的背景―」『古代学研究』156